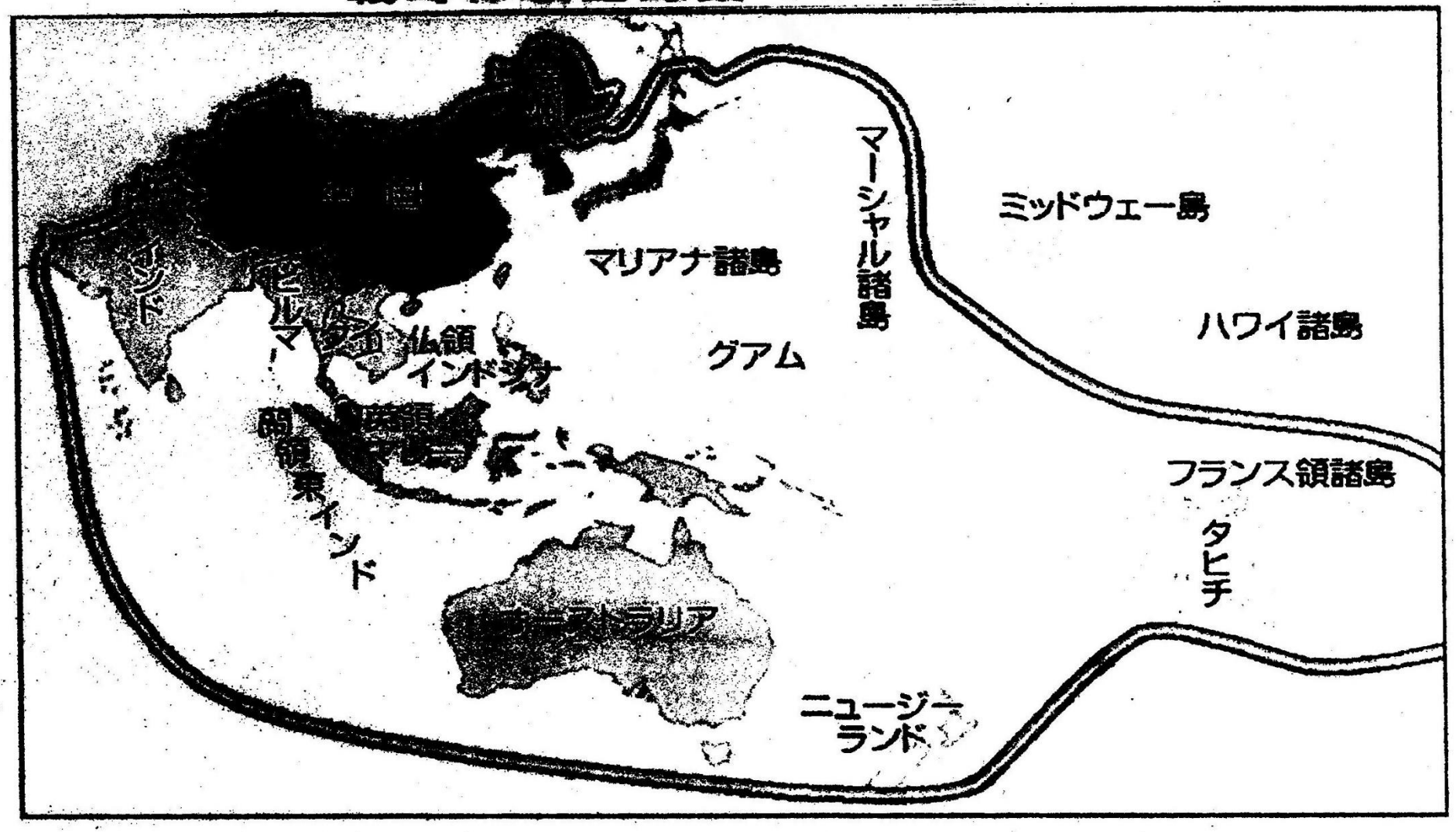
第２８回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集＜２３集＞



ところ　緑生涯学習センター
月・日　平成２８年７月３０日

★発刊によせて★

★水と緑の美しい星に住んでいるのに、人は戦争を繰り返し止めない中で７０年間も日本は戦争で一人も殺していないのは、叡智と決断で武器捨て平和憲法の賜物だ。

★２８年前、緑生涯学習センター館長は、センター利用サークル別筆頭者を集め、「戦争を憎み、今の平和を護り繋いで行く活動を毎夏開催するなら会場を提供する。」と。館長の志を受け継いだ戦争を知らぬ人達が、戦争体験者・語り継ぎ者を探し毎夏、今年も来年へ繋ごうと開催している。

★ご自分で折られた折鶴を持って、米国大統領はヒロシマ爆心地に佇ち、平和のメッセージ記入二羽を日本の将来を託す子供に、二羽を被爆犠牲者に捧げられ、核兵器廃絶を再度世界へ向け発信なされた。これを機に、広島・長崎を起点に世界平和大うねりの出発点に発展させたい。

広島へ行きヒロシマの水を飲む　四郎

★戦時体験記録集次年度から戦争を知らぬ方が受け継いでくださった。感謝。

目次

表紙・大東亜共栄圏構想図考・・・・・・・・・・・・一頁
脳裏に残る別れた父・・・・・・・・・浜島房子　四頁
出征家族を襲うＢ２９・・・・・・・・渡辺志げる　六頁
銃後を悲惨に追い込んだ戦争・・・・・・鈴木久子　八頁
棄民の足跡（あらすじ）・・・・・・・・・編集子　十一頁
棄民の足跡（完結篇）・・・・・・・・・夏梅誠一　十五頁
自分史（十六歳～十九歳）橋詰四郎・・・・・・・・二十五頁
三十頁～三十四頁戦争歌とマスコミ
三十頁♪肉弾三勇士♪日本国民歌♪
三十一頁♪少国民愛国歌♪みくにの子供♪
三十二頁♪大陸行進曲♪父よあなたは強かった♪
三十三頁♪兵隊さんよありがとう♪
三十四頁♪防空の歌♪出せ一億の底力♪

表紙・大東亜共栄圏構想図考

橋詰　四郎

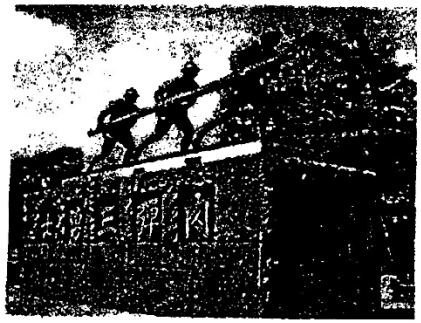
昭和の戦争を十五年戦争・日中戦争・太平洋戦争・アジア太平洋戦争・第二次世界大戦、等々と。複数称を使い分け。どのような戦争であったかをボカシているようだ。大正１４（１９２５）年生れの私が体験させられたのは、国家神道（天皇教）による皇国民教育。天皇陛下に命を捧げるのは一家の名誉であり、忠君愛国の鏡と賞賛され、現人神の大御心に包まれた一億臣民はアジアで秀れた民族である。よって、大東亜（アジア）に巣くう欧米を駆逐し、アジアを日本国臣民と同じ、現人神の大御心で満たす使命に燃え、アジアを大日本帝国のリードで共栄するための大東亜戦争であり、欧米色を排除する正義の『聖戦』である。と。国を挙げ「進め一億火の玉だ」の合い言葉を掛け合い、猪突猛進させられていた。

昭和２０（１９４５）年８月１５日以降、日本人は戦争の『終り派』と『負け派』に分かれ、負け派は、大東亜共栄圏建設構想は、アジア全土も日本化（皇民化政策）し、達成後『八紘一宇』の地球構想だったと看破。終り派は、アジアを欧米から解放した『聖戦』であったと敗戦後５５年目に、高さ１２メートルビルの４～５階ほどの巨大な【大東亜聖戦大碑】を平成１２（２０００）年８月、金沢市の石川護国神社に建立している。

※聖戦大碑台座は、高さ２メートル・幅４メートル・奥行３メートルの四面に賛同個人名７８７人。戦友会等団体名２７２。計画を知り私達は、戦友会総力で、寄付阻止運動。靖国神社「これ以上物議源は迷惑」と拒否。橿原神宮「なにを考えとる、時代錯誤もはなはだしい」と相手にせずと報告を受け、神社庁は判っていると安心。突然、森総理の選挙区「石川護国神社に決まると知らされ、更に割烹着にタスキ戦前の「愛国婦人会」「国防婦人会」の復活を思わせる応援婦人多数と。完成した台座に、反対した戦友会名や「少年鉄血勤王隊」「少女ひめゆり学徒隊」も無断使用と知らされる。

昭和６（１９３１）年９月。満州に派兵されていた関東軍は、自作自演で鉄道線路爆破。中国軍の仕業と満州全土を制圧。悪事露見，世界各国より非難されるも、翌年１月天皇よくぞやったと『優渥（ゆうあく）勅語』で賞賛し労を労い。３月。五族（満・漢・蒙・朝・日））協和・王道楽土・東洋のパラダイスと世界に宣伝し、傀儡国家「満州帝国」建国宣言。

昭和７（１９３２）年３月、支那北部に派兵されていた日本軍は、世界が注視している満州から目をそらさせようと、買収した中国人に僧侶を殺させ、日本人僧侶が殺されたと「上海事変」『肉弾三勇士』発表。政府は事件・事変にとどめる「不拡大宣言を内外へ宣言するが、直属（大元帥陛下・天皇）の命令のみに従う天皇軍・皇軍は、戦火を拡大へ向け軍事行動した。一方、支那国の二大軍閥（張学良＝ちょうがくりょう）と（蒋介石＝しょうかいせき）は昭和１１（１９３６）年、内戦を停止し抗日民族統一戦線宣言。



肉弾三勇士の像

昭和１２（１９３７）年７月、支那北部北京付近に派兵されていた日本軍は、北京郊外で支那軍の挑発を促す軍事演習を展開。日中戦争へ拡大させ、日本政府の不拡大宣言は実現できなかった。小さな国の強い皇軍に対し、広い弱い国は首都を奥地へと遷都し、日本は「北支派兵」から「中支」「南支派遣軍」戦線を拡大し、占領した地域へ教職・宗教者の兵士で編成した『宣撫班』を常駐させ、占領地域で「誓詞の言葉」を斉唱させ「皇民化」に努めた。

『君が代』で『日の丸』を掲げ、『宮城遥拝』で天皇を拝ませ、

一　私共は大日本帝国の臣民であります

一　私共は心をあわせて天皇陛下に忠義を尽くします

一　私共は忍苦鍛練して立派な強い国民となります

従わぬ者は公開見せしめ刑を行なった。

昭和１８（１９４３）年１１月、帝国議事堂＝国会で、『大東亜会議』を開催。日本は首相、中国・王汪精衛国民政府行政院長。タイ・ワンワイタヤコン首相代理。フィリピン・ラウレル大統領。ビルマ・バー、モウシュショウ。インド仮政府からチャンドラボース。満州国・張景獲国務総理。各国指導者を集め『大東亜会議誓詞』

一　大東亜各国ハ共同シテ大東亜ノ安定ヲ確保シ道義ニ基ヅク共存共栄ノ秩序ヲ建設ス

一　大東亜各国ハ相互ニ自主独立ヲ尊重シ互助敦睦ノ実ヲ挙ゲ大東亜親和ヲ確立ス

を日本指導で確認しあったが、アジアの日本化は明々白々だった。

入隊一一題

①祝入営＝徴兵検査甲種合格現役入隊者

②祝出征＝除隊者と乙種以下召集者　赤紙を使用した

①現役入営＝祝入営　義勇奉公　○○○○君の幟旗で送られた。

♪戯れ歌♪初年兵哀歌

(1)お国のためとは言いながら
他人の嫌がる軍隊へ
入り行くこの身の哀れさよ
好きなあの娘と泣き別れ

(2)演習終わり日が暮れる
月の光に照らされて
鬼の古兵の古靴を
磨くこの身の哀れさよ

(3)訳も解からず殴られて
消灯ラッパ鳴り響く
五尺の固い藁蒲団
これが僕等の夢の床

(4)いよいよ夢路に辿る頃
鬼の古兵に起こされて
整列ビンタその後で
タン壺洗うこの姿

※戯言
輜重輸卒が兵隊ならば
ちょうちょ蜻蛉も鳥の内
潜水艦が軍艦ならば
潜望鏡に花が咲く

(5)一期の検閲二期三期
秋季の演習早や過ぎて
鬼の古兵が満期する
見送る僕らの胸の内

国益「富国強兵」帝国主義で列強入りを目指し、封建制度、女は選挙権もなく、嫡子外男子同様人権もなく男尊女卑社会。軍事費優先に国民は貧しさを強いられ、性産業へ我子を売る家庭もあり、人間を売買した。男子２０歳で徴兵の義務を制定。徴兵検査は甲種・乙種・丙種・丁種等（以下略）の規定を設け、不合格制度は設けず、各種毎の合格者を認定し、甲種合格者のみ兵役の任を課せた。健

康な２０歳の男子は一家の大黒柱父親に劣らぬ稼ぎなので、徴兵検査当日、醤油等一合一気飲みし体調を崩し、乙・丙種合格狙いも横行した。

国民を臣民戸位置付け、国家神道化へ誘導し、甲種合格者の入隊日は、町村コミニティー毎に地域の氏神に集合。次々と地域有力者の激励後、義勇奉公・武運長久を祈願し、参加しない住民は非国民のレッテルを貼り差別し、天皇陛下万歳の三唱に合わせ、勇壮な花火を合図に軍歌を高らかに、最寄り駅まで見送りの行列をした。

戦争もなく平和なら兵士数も減らし、甲種合格者が多く定員？を超えた時は、例えば町村５名甲種合格者から「クジ逃れ」で一名兵役免除者を選び４名入隊とさせた。徴兵検査で男子の喫煙・飲酒・花柳界への出入りが解禁になり、「クジ逃れ者」は入隊者に『申し訳ない』と借金をしてでも一席プレゼント。入隊者は花柳宿一泊を要求したとも噂された。

②召集入営＝祝出征　現役満期除隊の補充兵と乙種も召集した。

昭和６（１９３１）年、関東軍自作自演で満州事変。政府不拡大方針宣言するも、関東軍へ天皇「優渥勅語」で労う。支那派遣軍優渥勅語に触発され事件・事変を拡大し戦争へ発展さす。兵員不足。補充兵を召集し対応。

現役兵と違い補充兵は既婚者が多く、大黒柱を失った留守家族は塗炭の苦しみに追い込まれた。小作農や個人商店主を『赤紙一枚』で僅か数日間で入隊さすのだ。祖父母、両親、妻子に「言い伝え」る間もなく『歓呼の声』に送られ♪我が大君（天皇）に召されたる♪命映えある朝ぼらけ♪称えて送る一億の♪歓呼は高く天を衝く♪いざ行け♪つわもの日本男子♪の歌に送られ、現役兵同様入隊だ。

残される家族が一言でも愚痴るものなら、在郷軍人会・愛国婦人会・国防婦人会の餌食にされ『アカ』とレッテルを貼り地域社会から疎外し、【進め一億火の玉だ・ほしがりません勝までは・勝利の日まで・鬼畜米英】等の合い言葉と共に、相互監視の【暗黒の時代】だった。

脳裏に残る別れた父

浜島　房子

私の戦争体験は、父が出征した昭和１７（１９４２）年２月から始まりました。大勢の村人たちの振る日の丸の小旗と♪「勝ってくるぞと勇ましく…」の軍歌を歌いながら大府駅まで歩いて見送りました。２カ月後の４月、父は外地（日本の国内を内地・日本の国外を外地＝戦場と称した）へ派遣されるからと、最後になるかもと面会に行きました。小学５年生になった私、２年生と３歳の妹と母の４人で名古屋の連隊へ大府駅から汽車に乗っていきました。妹達はなにも判らず汽車に乗れることに喜んでいました。これが父との最後になるとは父も母も私もしりませんでした。

母は神経痛の持病があり農業の仕事がきつく、私達子供も母の指導に従って農作業を手伝いました。働き手を無くした農家はあわれで、ご近所の農家の人達が力を貸してくれ、何とか続けることができました。父からの便りでフィリピンに派遣されていると判りました。昭和１８年の初めの頃まで日本軍の勢力が強く、攻めの戦いで手紙もどんどんきました。私も手紙と一緒に学校で書いた習字や図画の作品もおくりました。父からの便りが嬉しくて待ち遠しくて楽しみでした父は私達子供の年齢にあわせて、ひらがなやカタカナと使い分けてくれて、それぞれが今も宝物と大事に持っています。

昭和１９年になると父からの便りがほとんど無くなりました。２０年に入ると父の消息はほとんど判らなくなりました。そしてアメリカ軍の空襲が始まり、空襲の回数も次第に多くなっていきました。

私は刈谷高女の学生になっていました。空襲で工場が破壊されたので、学校の教室に工場の機械を取付け、私達学生は勉強をせず女の工員になり勤労学生と呼ばれていました。学校の運動場は開墾してさつま芋畑になり、収穫した芋はお米に代わり主食となり配給制で代用食といいました。

もうこの頃になると父の心配よりも、兵隊へ大黒柱を取られ、残された母子４人がどうやって空襲から逃れたり、どうやって生きていくこととの戦になっていました。こんな生活の最中、昭和２０年８月１５日の敗戦の日を迎えました。多くの人が米軍の空襲で家を焼かれ、家族が殺されていました。私達家族はみながここまで無事に来られたことが不思議な思いでした。

敗戦になると内地に出征した兵隊さんが帰って来るようになり、２０年の暮れ頃より外地の日本兵が帰り始めました。ラジオは毎日尋ね人があり、復員された兵隊さんのお名前を放送していました。

私達家族はは叔父が買ってくれたラジオにしがみつき、父の名前を聞き漏らさないよにラジオ放送に耳を傾けていました。フィリピンから帰った人がいると聞くと母はどこまでもその人を探して訪ね歩きましが父の消息は掴めませんでした。

　畑仕事をして家に帰ったら父が帰っていたとか、夜雨戸を叩いて寝ている家族を起こしてくれたりとか、一日千秋の思いで、いろいろな形で父の帰りを待ちました。こうして待つうちに2年が過ぎました。忘れもしません、みぞれの降る寒い昭和22年12月。今でもハッキリ覚えています、やっと帰ってきた父は四角な木の箱と、箱の中に父の名前が書いてある紙一枚になっていました。これだけで生きて帰る父をあきらめ、死を認めよと言うのでしょうか。○月○日場所○○現認者○○と記してあっても、父の骨も頭髪も爪も入っていない空箱一個で…それから何年も何年も待ちました。

　敗戦から20年過ぎた頃だと思います。グアム島で生き残っている日本兵がいると報道されました。小さな島でも生きているのなら、大きなフイリッピンのジャングルならと希望を膨らませました。働き手を無くした戦後の母子家庭は哀れでした。母は父の残した3人の娘を育て上げ61歳で亡くなりました。私は長女として亡き父と母が安心して永眠できる家庭を築き、守っていかなければなりません。今、育ち盛りの孫達に、私のような思いをさせたくありません。二度と戦争をしては、させてはいけないのです。

今の平和が被爆国日本人の英知で、守り継がれていきますように。

出征家族を襲うB29

渡辺志げる

　娘は嫁に出すまで手元に置く、頑固な信念の親の躾に背き、私は家を出た。学校の先生が両親を説得し、私の性格なら向いている道と勧めてくれ、それに国費で養成される日本赤十字社看護婦科なら、義務もつくけれど、総合病院付属看護婦学校というので、やっと父のみが許してくれ入学となったのだ。母は、女としての修行ができないとあくまで反対。でも私は母の要望項目も身に付けてみせると、茶道・華道・料理・和裁・洋裁・習字・琴・三味線等、出来ることは何でもと、母への意地もあり、お稽古事は休まず続けた。

看護科は言うまでもなく、見るもの聞くこと教わること全て新鮮で充実した日々。何よりも恵まれたことは、それぞれの先生方が皆素晴らしく。我が青春何一つ悔い無しと、幸一杯の毎日。いつまでもこうしていたいのに、母に強く押し切られお見合い。名古屋人と結婚。その幸は1年と9カ月。生まれた子どもが78日目の昭和17年3月打ち砕かれた。夫は出征。秘密部隊なので誰にも話せず私一人が、市電鶴舞電停で見送った。それが、最後の別れになろうとは…。

その後、別に住む主人の家は、36発束ねた焼夷弾がそのまま落ち周囲の家を巻き込み全焼。私は、鶴舞公園の南の町に借家住まい。公園内に配備された高射砲陣地目掛けて米空軍の空襲は昼夜に関係なく、しつように攻撃し、地域住民の日常は、さながら最前線の兵隊以上に、空襲・待避・消火にと振り回されていた。

神風が吹き日本が勝と教えられていたのに、冬になると空襲は一層激しくなり、真夜中防空壕へ逃げ込み寒さと恐怖で震えていると激しい地震だ。それからは毎日毎晩、激しい地震と空襲の連続だ。公園近くの歯科医の先生が、メリヤスシャツにモモ引き姿で真夜中飛び出してきて、公園内の桜の幹にしがみつき「えらい世の中になってしまった。上から（空襲）と下から（地震）だ。と、叫んでいたのは今も忘れない。

夜の空襲は、先ず最初に照明弾を落とし昼より明るくし、目標目掛けて爆弾焼夷弾を次々に休む間もなく落とし、子どもは防空壕に避難させ、大人は消火に必死で走り回る。1束36発の焼夷弾は地に落ちる前に1坪に1本の割合に広がる、紙と木の家の日本用に開発したと噂されていた。20～30坪の広さに落ちた焼夷弾は、花火のように火を噴き出す。すかさずスコップで砂をかけ消したり。消火砂が無ければスコップの背で強くパンパン叩くと消える。そんな繰り返しで、勢も根も尽き果てる、神経消耗戦でもあるのだ。

燃え盛る炎は強い渦巻きの旋風を発生させ、煙諸共襲いかかってくるので、苦し紛れにグランド方向へ逃げ、目の前の電話ボックスに飛び込み炎と煙をやり過ごし助かりました。上前津辺りの空襲はひどく、鶴舞公園の図書館の前に遺体が山積みに運び込まれ、遺体を引き取る遺族も焼死体なのか、幾日もそのままで、腐り異臭が発生して戦地以上の悲惨場で、筆舌では表現出来ません。鶴舞公園も上前津も戦場では無いのです。市民の日常生活の場所なのです。

出征兵士の家族は疎開と決まり、私は岐阜県下呂より16キロも山奥。そこから更に4キロ上った東白川村神戸に疎開しました。食料は名古屋のような便利さはありませんが、蕨、ゼンマイ、竹の子、南瓜、野菜も少し栽培しました。敵機は飛んできても爆弾は落とさず、毎晩名古屋方面の空は赤々と燃やされて、攻撃されている地響きが伝わってきて無気味でした。そんな8月15日昼、天皇陛下がラジオで国民に敗戦を告げられ、一日遅れて主人の戦死公報が届きました。敗戦の惨めさに続いて夫の死の知らせに、この世には神も仏もいないのだと自分に言い聞かせ、呆然自失、何もかも手につかぬ日々が続きました。

無気力な死人の目で我が子を見つめていました。見つめていると、澄んだ子どもの目の奥に小さな光が見えた時、心を取り戻し子どもと一緒に生きていこうと決心し、看護婦として働くようになりました。看護業務は厳しいけれど私は、看護生の時から外科が好きで、手術患者さんの相手、命をかけた仕事だけに、心の休まる暇は一時もありませんが、それだけやり甲斐もあると夢中で働き、ナースの皆さんや若いドクター達が我が子と遊んでくれたり、職場の仲間に助けられて我が子の成人式を迎えることができました。

私は今もあの、いまいましい戦争を憎んでいます。
医療現場で命を守る奉仕に携わった一人として、
平和が一番、戦争反対です。

銃後を悲惨に追い込んだ戦争

鈴木　久子

昭和19（1944）年12月生まれの次男は、生まれると直ぐ裏庭に造った防空壕の中での生活に追い込まれた。当時、主人は名古屋市熱田区の愛知時計電気KK・軍需工場の技術者で、海軍関係の仕事に従事していました。3日に1度くらいの帰宅が戦況と共にたまの帰宅。帰宅して防空壕の生活を見て「子どものために親は犠牲しなくては」と申し、1歳半と生後1カ月の2児を連れ、昭和20年1月上旬、母と母子3人4人で郡上八幡へ疎開しました

雪の郡上八幡は毎日のように雪が降り、生野菜は八百屋にもなく、各家で地下貯蔵の土地柄で入手に苦労しました。主食の米も、副

食の全てが私の衣類と交換の生活で『筍生活者』と呼ばれる造語の発祥源の生活で、筍が皮を一枚一枚脱いで成長するように、私の着物を一枚一枚農家でお米と交換して生きているのでした。次男の粉ミルクも1カ月に一缶あるかなしの配給で、足りない分は少しのお米を「ゆきのひら」と言う病人の軟食調理土鍋半円筒型で細火で根気良くトロトロにし少し砂糖を加え「代用ミルク」としました。

炊事・調理に使う火力は、電熱・ガスの家庭で育ちました。郡上八幡の火力は、落葉・枯枝・藁・薪・木炭で、炊事（台所）は土間なのでその都度草履、下駄に履き替える不便さや、ガスコンロに代わる「竈」「七輪」の直火は「釜」「鉄鍋」「土鍋」の底は煤がこびり付き、洗う感覚でなく、削ぎ落とす力作業で、ガスコンロのコック開閉で火力調整してきた私には、炊事はさながら縄文時代の辛さでした。石清水を集め軒下を流れる清流の氷を割りオムツを洗います。指先が千切れるような寒さの痛さを我慢して、これも「戦争から子どもを守る親の勤め」と頑張りました。

軒下を流れる清流も水温み、飛騨の山々の木々も芽吹き疎開生活にも少しづつ慣れ始めた昭和２０（１９４５）年６月９日御前８時頃、突然「空襲警報」この山村にもとドキットと身構えました。警報は直ぐ解除されたと思ったら再度「空襲警報」軍部の混乱と的確な情報を掴めない軍部の弱体化を知らされました。その内に、９日の空襲は愛知時計の狙い撃ちで、会社は全焼し、大勢の爆死者の中に主人もと知らされましたが、戦場よりも激しい空襲下の名古屋へ行くことなどできませんでした。

母も私も２人の子も栄養失調になりかけ、６カ月の次男に小児科医は「母乳でなければ回復の見込みなし」と　途方にくれていると「赤ちゃんを亡くしたお母さんがいる」と、教えてくれる人が現れ、悲しみの涙を流しつつ次男への授乳を、私は喜びの涙を流して見ているのでした。１日に４～５回も授乳を受けて、目に見える勢いで次男は回復し、命を取り留めました。「地獄で仏様に遭えたのです。」体力を付けていく次男は天真爛漫のみ笑で、子を亡くした母親を、夫に先立たれた妻に癒しと慰めを与える存在なので、この時の心境は筆舌では現わすことができません。

８月１５日雲一つない晴天、次男をおんぶして医者からの帰り道、電気屋の前に大勢の人だかり、ラジオの声は雑音が多く聞き取れない人が多かったです。するとリーダーらしい人が説明してくれま

した。「日本は戦争に負けたんだと」私は呆然としました。男達の噂話が始まりました。男はみんな連れて行かれるとか。私は二人の息子をどのように隠くそうかと考えていました。

８月下旬、主人の『白木の箱＝遺骨』がとどきました。ささやかな葬儀を済ませてから、、父のいる蒲郡に移りました。職も収入もなく、わずかな貯金と少しの配給米でここでも「筍生活」がはじまりました。当時主人は３４歳。私は２８歳で、主人の金属年数１１年、退職金が２万４千円ほど送られてきました。このお金は手を付けられない、二人の子どもの達の学資にと貯金にしました。

敗戦の混乱は増えるばかりで、貨幣価値は変わり、預金封鎖。自分のお金も自由に下ろせないし使えない制度です。何をして生きていこうかと考えてばかりの時、学校の先生が足りないと知り、父の応援もあって、教員の試験を受けることにしましたが、高等女学校卒業だけでは単位不足なので、通信教育は勿論、あらゆる単位習得へ向け、認定講習会等々に挑戦しました。土・日や夏・冬の長期休暇に行なう講習会、休みと言う休みは返上し、目標の教師になるのが私の戦場で、１００％家族の応援でむだなく試験をクリアーし定年まで勤め更に、産休補充教員を６５歳まで働きました。

戦争が終わり半世紀以上過ぎました。二人の息子は乳児、幼児で父を亡くし父の記憶すらありません、二人とも大学を卒業、社会人、結婚、家庭、家族と一見平和な一家ですが、父を知らぬ父親として戦争犠牲者なのです。家族を失い離散させる戦争、二度としてはいけないし、させてもいけないのです。

愛知時計空襲

編集子

「熱田空襲」とも、アメリカが世界に誇った「超空の要塞」ボーイングＢ２９戦略爆撃機。重さ３３トン・幅４４メートル・長さ５０メートル・乗員１０～１４人・爆弾１０トンを積み、テニアン、サイパン島から日本空襲に往復した。

昭和２０（１９４５）年６月９日朝、名古屋へ４２機飛来、空襲警報、通過したので警報解除。防空壕から出て仕事や作業を始めた９時１７分「空襲警報よりも爆弾が早かった」と。通過と見せかけユータンだったのだ。時計の看板で「軍用機・魚雷・放談・機雷を生産。２トン爆弾１３５発投下、２１８７人以上が爆死した。

寄稿・夏梅誠一氏“棄民”のあしあと・完結編

編集子

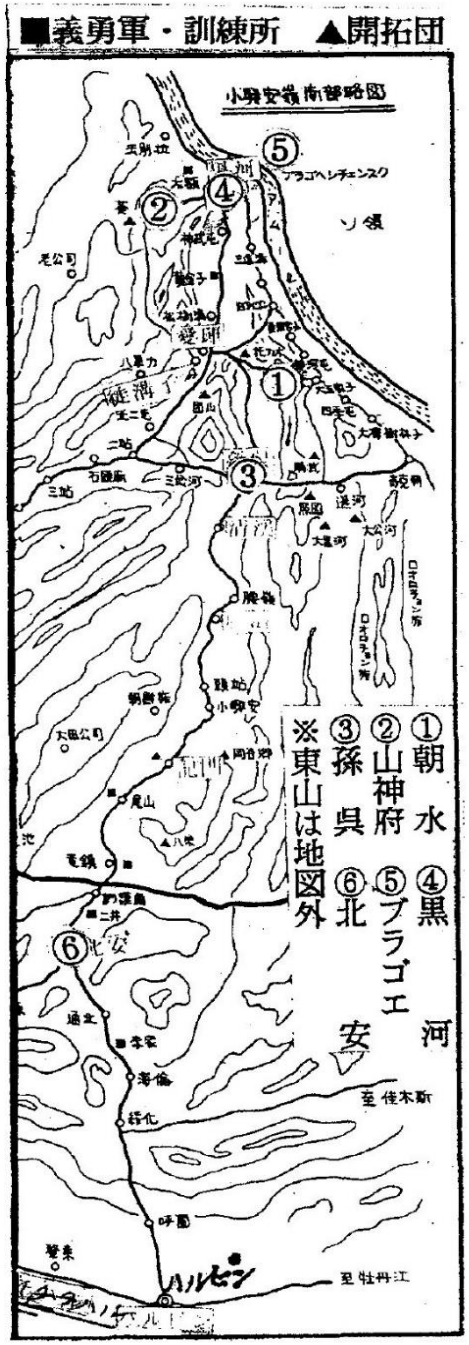
「棄民のあしあと」は、本『集い』「第２３回戦争体験を語り継ぐ集い」平成２３年「戦時体験記録集・第１８集」に次ぎのような書き出し

〜昭和２０年満州を占領したソ連軍に日本政府が発行した公文書がモスクワ公文書館に保管されている。内容は、１８０万在満日本人を日本へ送還せず、日本国籍を離脱してまでも満州に定住土着化依頼〜

日本人を日本政府が《棄民》した公文書である。

見捨てられた在満１８０万の内、軍人軍属を含む５０歳までの男子８０万人は戦後復興にソ連へ強制連行され、日本人の誰もが経験したことのない酷寒・飢餓・重労働。疫病で七万から八万の犠牲者が発生したといわれ、一方百万の保護者なき婦女子と老人の逃避行は多数の死者と孤児発生源となった。「棄民のあしあと」は、昨年九月全巻脱稿出版され『平和を守る』一冊と高く評価されている。

◎地図による夏梅誠一氏の足跡　地図①〜⑥と文中「東山」は地図外



①の北満州酷寒地第六国境守備隊朝水陣地へ歩兵現役入隊。玉砕してでも最低三時間死守の国境警備を四冬（四年）行なう。

②で昭和二十年六月から下士官候補教育中八月九日ソ戦。全員徒歩で二百五十キロを破し③孫呉へ。

③で第六国境守備隊撃破し南下ソ連軍迎撃態勢十二日完了。さあこいと構える。十五日天皇の命令で、ソ連軍が来ないので戦闘もなく自分達だけで武装解除。十七日初めてソ連軍を見る。このソ連軍は東満州制圧後。北安↓孫呉を北上。十五日後も抵抗している朝水攻略部隊で、カラシコフ連発銃で武装し大型トラックに満載

された幾台もの歩兵部隊が次々北上に続き、カノン砲、榴弾砲、自走砲、迫撃砲が続き、装甲板七十ミリ・八十五ミリ砲搭載・重量二十五トンのT34型戦車が幾台も砂塵を上げ北上。六月まで私がいた陣地で戦友達が抵抗していたのだと後で知る。

③の孫呉には日と共にソ連軍により民間日本男子が続々集められ、半数以上民間人で約二万六千人。時計等ソ連兵に略奪去れ、今日は幾日か日にちも時間も判らず、編成替えを毎日繰返し五十歳前後のおっさんや痩せこけた少年など千人位で見知らぬ者同志にさせられ徒歩で④黒河へ。

④満洲各地からの略奪物資を船に満載労働させられ、船諸共⑤ブラゴエシチェンスクへ（以下ブラゴエ）。

⑤ブラゴエの廃虚大邸宅跡へ収容され家具・調度品・電気・ガス・水道の他窓ガラスもなく板で真昼も屋内暗黒屋敷。日も時も判らず、歯磨き洗面、着替え、入浴、トイレペーパー皆無の侮辱生活強要され、屋敷内に張り巡られた電線の被覆を抜き取り灯心にロソク代りにする。就寝は板の間に毛布一枚にくるまり、隣と体を触れ合う始末。競技用プールほどの巨大な穴を幾つも掘される。街に商店は一軒もなく、裕福地区と貧困地区に別れ、貧困地区の子は裸足で群がり捕虜が船から担ぎ卸す略奪穀物袋からこぼれると一斉に奪い合う。人民を搾取する資本家、地主の無い労働者、農民の天国が誕生し僅か二十年程で貧富の差発生と知る。

労働は、満州から略奪したあらゆる物資の荷卸し、日本では「沖仲仕」と称し『超一級重労働』八時間労働でなくノルマ達成労働で毎日十時間以上体力低下。発病、事故、発狂、自殺等で死者続出。プールのような大穴死者で埋まり、板の間就寝はガラガラになる。発病し医者の診察も薬の投与もなく回復の見込みもない「死を待つ病人」と国際法に抵触する「十八歳未満の少年」はいらないと他国の黒河へ追放する。

④黒河はソ連で働けぬ病人で溢れ毎日大勢死に、診療投薬も皆無。中国解放人民軍の管理下になり、点呼、監視も無く三食粟粥を食べ労働も使役もなく自力静養に努める。深夜大音響で目覚め、日にちも解からぬのに今日は昭和二十一年二月下旬だと呟く。地下深く春が囁き結氷黒龍江の氷を割る春告音なのだ。自然は正確で二月中旬でも三月上旬でもなく必ず二月下旬だと先住民の古老から聞いていた。

ブラゴエには一軒も無かった商店が江を隔てた黒河には病人日本人相手に個人食品店が露天に並び「安いよ・栄養あるよ」と客引き競争だ。通貨は解放人民軍の「元」「ルーブル」「日本円」

国民党軍が勢力を強めると『元安』解放軍が勢力を強めると『元高』になり日本人に影響するだけに関心をもつようになる。元・ルーブル・円で一番力を持っているのが敗戦国の『円』だ流通通貨の不思議性。私は軍隊に入るとき戴いた餞別を数えたら大金持ちになっていた。病人回復食を露天商で選び養生に専念した。

日本人相手の中国人露店商人達が口を揃え「日本人は三百五十粁南の北安へ野宿しながら歩いて行くよ、病人ばかりだから、夜の冷えも強く死ぬよ」と教えてくれた。南下は日本に近づく帰国行なのだが喜べない。三百五十粁歩く自信など皆無の病人ばかりだ。朝食後場所を離れるなの指示があり「三日後諸君を北安へ移し、ソ連から一方的に押し付ける病弱日本人を受け入れるためである。歩けないものは馬車。歩ける者は四人一組に一週間分の穀物・マッチ・塩を渡す、自炊と野宿だ」と四月下旬出発。

夏梅氏は上官風を吹かせないS・国策で満州に村毎渡満しソ連の男狩りでシベリアへ連行され発病した農民のF・ソ連軍と交戦もなく無傷の第七国境守備隊員のK。K達は全員シベリアの奥地コムソモリスクで森林伐採、僅か三カ月で半数死亡。残る半数全員発病衰弱し黒河へ逆送された一人で中国語堪能の四人でチームを組む。歩けない者は五十台ほどの馬車に分乗、六十人の解放軍兵士の護衛であったが、三日目Kが解放軍兵士間の話だと「千五百人以上で出発し、行列の長さは三十粁以上に延び、犠牲者（行路死）も発生していると。ソ連を再度憎んだ、北安～黒河間の線路と枕木を満州から撤退する時、捕虜に略奪を手伝わせ第二シベリア鉄道へ投入したと言うのだ。Sは体力の弱い夏梅氏に合わせ歩行し、食料は行程の半分で食い尽くす。KとFは『円高・日本円』で中国人から食料を有利に買い日本風に近い料理を振舞って、楽しませてくれ計画倍の二週間で北安に着いた。

⑥北安の収容所長は四人揃って一番乗りの私達のチーム力を絶賛し迎えてくれた。計画一週間で到着したのは歩けぬ馬車組だけ。単独で着いた者は弱者の食料を奪いチーム崩壊者とか、強者に見捨てられた行路死は四百人を超えたと噂が流れた。共に野宿と炊飯を二週間もさ迷うように歩いた私達は、この四人から離れると「死」と互いに不思議な『絆』を感じていた。

収容所長は「収容所は寝たきり患者に、働き先に起居してほしい」と相談してきた。入隊以来「命令に従う」一辺倒が、命令する側からの「依頼」に驚き、Sが代表して四人一緒なら同意と返事し「北安軍政学校」に炊事として起居することになる。建物は

日本の全寮制校舎でいたる処に日本が残り「火の用心」「節水」「節電」「一歩前へ」等々張紙「畳の上で死にたい」願望者は六畳の和室を使用し体調に、体力回復に必要食を各自で作る。生徒はマイ食器を袋で各自持ち「立食い」食器洗いは無く、年配者に礼儀正しく、軍事訓練は日本と同様。旧式単発銃ではアメリカの最新鋭銃使用の政府軍には勝てないと思うのに「元高」になり、一番の変化は私達に監視兵が付かず行動が自由になったことだ。

収容所長の呼び出しで出頭、収容所は黒河から馬車で送られてくる寝たきり病人で溢れ、皆虚ろな眼で放心自失。二カ月前の自分と同じと思う。所長は「君達の経作業を黒河から送られてくる日本人に与え、君達は炭坑で働いて貰えないか」で※東山（トンサン）炭坑へ、数年ぶりの客車移動に興奮して出発。

※東山＝中国東北地図＝チャムス北方に位置する鶴崗の一部。

炭坑側は日本側に十人に一人組長。組長十名から一人寮長を。六名の寮長選出の組織をつくらせた。ソ連から黒河に戻された日本人に解放軍は朝夕の点呼もさせず見事に日本軍の上官の命令は天皇の命令の階級・年功序列の『初年兵集合』で割りの合わぬ事項から逃れた悪癖組織を断ち切ったのに、炭坑労働組織を巧みに利用し、軍隊の階級制度をSを除く将校達が画策復活させ重苦しい皇軍の雰囲気に一変した。

労働は地下で掘削（石炭掘り）と坑木（掘った穴の落盤防止）に別れ、四人は夏梅氏の体力を考慮して掘削より軽い低賃金の坑木作業を選ぶ。親方の中国人は「今は暖かいが冬になると君達も寒さに勝てず暖かい掘削を選ぶ」と予言し、掘削やハッパの必要場所と爆破方法等を教えてくれ、冬到来と共に親方予言通り炭鉱夫に転職し、昭和二十二年を迎える。

松花江を境に対峙していた内戦も解放軍が南満州も掌握し、炭鉱労働者にも活気が漲り環境が好転へ動き出したようだ。夜勤明けで寮への帰路農地を測量し、貧農、小作人が大勢で一人の地主に罵声を浴びせているのだ。この弱者が強者を倒す運動は加速化し数日後の早朝、鉱山側の偉い人、監督でもないのに威張っていた連中が労働者の罵声に平身低頭ひたすら謝罪一方に驚く。朝食後寮長が「諸君も知っての通り、農地改革や農民の地主糾弾。炭坑労働者の立ち上がり、日本人私達はなにをするのか皆の声を聞かせてほしい」すると直ぐ開拓少年達が発言「俺達は十五・六で親元を離れ開拓と軍事教練で絞られ、負けた兵隊と一緒にシベリアでマリンケ（ロシア語で子供）扱いされ将校や古兵に酷き使

われた」続いて初年兵が「俺は十七歳で勅令『天皇の命令』で兵隊にされ、シベリアでは使役だけ一人前に扱われ、ロスケが夜中や休日に仕事をせよと言うと、初年兵や開拓少年が割り当てられ、結果とて大勢の死者は若者ばかりだった。多くの若者を死に追いやった責任をとれ」と迫ると、別の若者達が横暴将校や古兵の名を挙げ、殴られた数だけ殴り返すと、将校は眼鏡を飛ばされ鼻血が吹き出る。その後名前を出された者達も含め公安が何処かへ保護したようだ。翌朝目を覚ますと【傍観的態度一掃】と書いた紙片が枕元に置いてあり次は俺かもと思った。開拓少年や下級兵士が皇軍崩壊の火蓋を切る。天皇の皇軍解体宣言から二年後のことであった。

採炭でハッパが必要になり三発装填し一発不発、不発には充分な時間をおいて点検。この日も同じように、近づくと突然爆発し左足首に激痛。一週間休み炭層に鶴嘴を打ち込む力急激に抜け倒れる。有毒ガス発生が原因、全員地上に避難し夏梅氏だけ食欲もなく混沌した日が続く。その頃から日本人への意識調査始まり、仕事は「デッサン」と言う。後日、迫り来るメーデーの正面会場中央に掲げるレーニンの大肖像画を描くことになる。絵描きが軍隊に入り戦闘訓練、シベリアで沖仲仕の超重労働。現在炭鉱夫。繊細な絵筆を持つ手でも指でもないのに描けるかと心痛。三百五十粁野宿行を達成したS・F・K等の励ましで、炭坑（中国側）の賞賛も戴くほどの出来映えであった。と。

※前回までのあらすじ

“棄民”のあしあと

夏梅　誠一

メーデー前夜は、辺境に生きる私達にとっては束の間の恵みの季節だった。休養室では、ケガや病気から回復に向かった連中が仕事復帰のための雑用に精を出していた。その頃の午前中、以前私達を診察した先生が寮長と一緒に来てくれた。私を診察した先生は「皆んなの診察が終わったら事務所へ来るようにと指示された。事務所にはすでに4人が待っていた。ここで先ず先生が「君達は今までここで療養しているが、私が診たところ回復してもこの炭鉱で働くことは無理だと判断した」と言われたので突然の言葉に驚いた。

つづけて先生は「病院と鉱山側が君達が働ける職場を探していたところ、近くの中国医大に受け入れ先がみつかったと」と言った。

先生の言葉を受けて寮長が「出発は先方の都合で今日の昼過ぎにしたい。その手続きはこちらでやるので、君達もすぐに移動の準備をしてほしい」と言われた。私達はそんな突然の話に戸惑いながらも応ずるしかなく、ヨレヨレの夏服に雑嚢を提げ、半ペラ毛布を担ぎアンペラ小屋に別れを告げた。そして敗戦以来、苦楽を共にした戦友達と別れの言葉を交わす暇もなく転出に従わざるを得ない自分達は、まだ俘虜生活のつづきにいたのかと思った。

医大へ行ってもどんな仕事が待っているのか判らない不安を抱えて口数も少なく歩いていると、丘陵の向こうに煉瓦とセメントの大きな建物と何棟かの日本人官舎が見えはじめた。あれが中国医大か、などと話しながらその建物の傍らまで行くと、守衛室が見えたので案内を乞うた。若い兵士に連れられて幾つかの病棟のそばを通り抜け、事務所らしい二階建階段を上り『教材課』のドアの前で止まった。まず兵士が中に入り、暫くして私達も中へ入るよう促し兵士は帰っていった。

『教材課』というおもいもよらぬ部屋に一瞬戸惑いを感じながら中へ入ると、会議机の前に座った三人の一人が私達に「ここへ座るように」と声をかけた。真ん中に座っている人が「私が教材課課長のSです。右が絵図室長のUさんで、左が製本室長のOさんです」と紹介された。私達を代表してHが鉱山事務所から託された書類をS課長に差し出すと、一読して左右の室長に回し読みさせた。私は顔と名前でUさんとOさんは日本人だと思った。しかし二人の『中国人民解放軍』の胸章を見て（ホォ彼等は解放軍の兵士か、それなら私達も…）と心中穏やかではなかったが、二人が平然としているのを見て、そんなものかとも思った。

S課長は早々にこの学校の概括的な話しをはじめた。「…この辺境の地に疎開し、炭鉱病院を接収した中国医大は、内戦勝利のために負傷した傷兵達の治療と介護に当たっている。同時に地域住民の疾病予防と治療介護に当たる医療技術者の育成にも努めている」と説明し「君達もその一翼を担う者として仕事に当たってほしい。教材課の役割はこれから実地を見て知ってもらいたい」と私達を製本室へ案内した。製本室には十脚ほどの机が並び、うち六、七人が講義原稿を見ながら鋼板ヤスリに置いた蝋原紙を鉄筆で切っており、窓際では書き上がった原稿を謄写印刷していた。

S課長は各部科、教室から持ち込まれた原稿を教材にするための

製本室であり、私の他四人は引き続きこの仕事の説明を受けるよう指示し、私はUさんと隣の絵図室へ行くようにと言われた。絵図室に入るとUさんは仕事をしていた三人の手をとめさせ、私を紹介した後、各人にも自己紹介をさせた。彼等は、そばに置いた本や写真を見ながら、机からはみ出した画板に置いた模造紙いっぱいに、「細菌の拡大図」「組織図」「筋肉図」などを描いているところだった。私はそれぞれに難しい箇所や所要時間などを聞いてみた。同年代らしいIが言った「先ず慣れることが先決だな…でも、やり甲斐あるよ」という言葉に励まされると同時にホッとするものがあった。ここが自分の仕事場になり、こういう絵を描くことが仕事になるのかと思うと、やってみたいという気持ちが湧いてきた。

私は絵図室、他の四人は製本室で仕事の段取りや要領などの説明を受けた後、庶務課へ回された。案内された部屋で、係りの者が区分けされた棚から私達の身丈にあった軍衣やシャツや下着などを各人に渡しながら「これを着るんだ」と言った。敗戦以来着替えもなくオンボロになっている日本軍の軍服軍衣を脱ぎ捨て、解放軍の軍服に着替えていると、誰かが「これでいよいよ日本の軍隊ともおさらばか：」「まだ帰国まで何があるかわからんゾオ」などとささやいているのが聞こえ、私は、また帰国が遠のいていくのかと、不安が先だった。庶務課で解放軍の軍服に着替え、食器セットの入った袋を貰って、教材課に戻り、私は絵図室へ入った。解放軍服の私を見たMがオドケ顔で「ヤァ夏梅同志、回来了（シャメイトンズホイライライ）」と挙手の礼をしたので、こちらもテレ隠しに頭を下げた。

終業時間になったので皆と一緒に大食堂へ行った。大きな建物には一脚六人用ほどの机が行儀よく並び、その一角に私達は席をとった。ここも椅子はなく立ち食いで、夕食は高粱飯に白菜と豚肉の炒めものと辛い漬物だったが、それら夕食のお菜もこの建物も、北安軍政学校とほとんど変わらないと思った。私達の宿舎は日本人官舎が当てられ、絵図組の同僚と同室だった。床上には畳をはめ込んだ木造の寝台が並び、私の寝台には何枚かの毛布と枕が置かれていた。翌朝皆と一緒に掃除を済ませ、粟粥と中華味噌と生葱の朝食を済ませ、職場へ向かった。自席に着いた皆は写真と描いた絵を見比べたり、仕事の準備を始めた。

始業時間になり、私はMと一緒にUさんの席で指示を受けた。Mは仕事を貰って自席へ戻り、私はUさんがアタリをつけた首から下

の『背面筋肉図』を見せられ「この前面をＩ君が描いているから、それを参考にこの背面図を仕上げるように」と指示された。私は「これが初仕事か」と緊張気味に図面を受け取った。私は「一寸見せてください」と声を掛け、Ｉの傍らに立った。Ｉが面相筆を巧みに使い、肩から胸にせまる大胸筋の流れを太く細く線描で質感を表現するあたりに熟練の筆勢を感じた。それが彼の言う「慣れ」なのかと思った。

自席へ戻り、私はいささかの緊張を持って初の面相筆を下ろした。それからは自分が描き慣れている肘を軸とした手法で線描を進めていった。十時から十分の休憩があった。製本室の誰かが「歌唱指導だよ」と呼びに来たので私もついていった。歌は『東方紅（トンファンホン）』だった。一節ずつ区切って歌う指導だった。それは日本工人会（労働組合）の教材課小組による文化活動であり、その日本工人会とは中国医大と付属病院に働く医師、看護師、各技術者など、日本人で組織される学習会や文化活動を行なう組合であるとＩが教えてくれた。

午後の休憩までに線描きを済ませ、鉛筆の下描きを消し彩色をはじめるころ、私の席へきたＵさんは二、三カ所に筆を入れ、何点か指示された。それを受けて私は朱に近い赤色で筋肉を描き上げた。Ｕさんの指導もあってか、初仕事を何とかこなすことができ一息ついた。次からの仕事も肩から指先までの筋肉図を与えられたことは、さしずめ線描きに習熟するようにとの指導だと受け取りそれに集中した。教材課初日の仕事を終え、その日の床についた私は、明日の仕事をあれこれ考えているうちに眠ってしまった。ついこの間まで炭鉱の休養室で抱いていた、体力が回復しても帰国のその日までどれだけ体力が持ちこたえられるのか、という、漠然とした不安が和らいだようだった。

絵図室の仕事は医学書の写真や図形を掛図にするほか、各部科必要に応え、内科の開腹手術や、腕や足の銃創手術などの写生に呼び出されることもあった。私はＭから、消毒薬と異臭が漂う手術室で医師や助手達の動きを素早く捉え写生した。という話を聞いて、その仕事に意欲を感じた。その機会は意外と早くまわってきた。それは眼科からの依頼によるもので、眼底に現れた症状の写生だった。先ずは兎を教材にとし、眼底を見る訓練から始まった。暗室で患者の眼底を見るため左手の親指と人さし指で瞼を開き、同時に親指と中指で凸レンズを挟み、右手に持った懐中電灯の光を瞳孔へ通す。

すると唯一、人体で血管が直接見える眼底を捉えることができる。そうして本番では、その眼底に現れた症状を先生の指示により写生し、掛図に拡大した。この仕事ははじめて患者に接しただけに緊張も高かった。

私達の勤務は月曜から金曜まで、就業時間は八時から十七時で、昼休みは正午から一時間。午前午後各十分の休憩時間があった。毎土曜日は午前中、業務学習と政治学習を交互に実施した。午後から日本人工会による文化、体育活動などに参加した。私が初めて業務学習に出たときは、ヴイナス胸像のデッサンに入ったころだった。室長のUさんが皆の実像の捉え方の違いを指摘し、それを話し合ったことは得難い勉強となった。更には短時間でお互いがモデルになり、クロッキーをやったことも仕事に活かされていたと思う。

政治学習は毛沢東の『抗日戦線論』と『持久戦論』のパンフレットの原文をOさんが訳し、教材課の日本人全員参加で討議した。初参加の私には、今までの学習経過を次ぎのように説明された。一九三四年頃から、延安の洞窟において毛沢東は『矛盾論』『実践論』をはじめ中国が社会主義をめざす諸文献を次々に発表していた。それらの著作は、いずれも中国人民解放の道筋を照らす灯台となった。その基本戦略は「大きくて弱い中国」が「小さくて強い日本」の侵略に抗する国民党と諸勢力との抗日連合の結成と、圧倒的多数の中国人民との抗日統一戦線の結成を大前提とした。

次には、反ファシズム戦争を闘う米・英・仏などとの連合。更には日本国内におけるファシズム勢力との連帯などの大連合の樹立。その「基本戦略」に基づいて、絶対勢力では多数である日本軍に勝利することができる。そうであっても、現実には優勢な日本軍との力関係の逆転を見るまでは、少数の中国軍が多数の日本軍の分断を謀り、局地戦に誘導し、彼等を少数に追い込み殲滅「遊撃戦（ゲリラ）」と、絶対多数の中国人民の協力によって力関係を変えていくことにあった。

日本が満州を植民地化し、揚子江沿岸都市を制圧。更に南シナ海からの米・英・仏などの援助遮断等を進めていたこの時期、毛沢東は延安において、抗日戦争勝利の展望をこのように指し示していた。このような文献をはじめて「学習」した私は、あの時代の毛沢東が、わかりやすい文言で民衆の共感と支持を得て「抗日統一戦線」を勝利に導いたことに、彼等が言う「新中国建設」についての「基

調」に初めて接する思いがした。日本の降伏後、私達が辿った道のりと、その後の中国内戦の推移を見ても、自分が置かれていた立場を考えようとする姿勢が充分ではなかったことを、この学習は私に教えてくれた。

毎土曜日の午後は、日本人工会の活動に当てられていた。その頃、ふた回り近い年長の先生方と奥さんがリーダーになって、社交ダンスを教えてくれた。先生方の笑顔は私達が知らなかった大正末期からのささやかなデモクラシーの時代を懐かしんでいるようにも見えた。

一九四八（昭和二十三）年旧正月の三ヵ日は、はじめての祭日休日となった。食卓には分厚く切った豚肉の蒸し焼や、白菜、ニラ、もやしと肉や卵の炒め物、鯉の空揚げに野菜のあんかけなどが並び、それらにかぶりついた私達は「新年好（シネンハオ）」を連発した。そして、私達が働く中国医大が瀋陽（旧奉天の元満州医大を接収し、近いうちに移動する、すでに接収要員は現地へ赴いている。という話に皆んな喜んでいた。それは私達日本人にとつても帰国への距離が縮まり、戦後、生死の程も伝えられなかった祖国への通信にも期待が持てると思った。とはいえ、軍隊時代と俘虜労役を合わせて六年。もし、その年月をとられていなかったら、どのような将来があったかなど、還らぬ過去を振り返つたりもしていた。

教材課の私達にも出発の日が来た。厳しい思い出しか残らないこの地だったが、去るとなれば感慨が残る処となった。

私達の専用列車が瀋陽に到着し、混雑する駅前を歩き出すとすっかり「おのぼり」さんになっていた。私達が歩く街並みには、ついが最近闘はれた戦闘の痕跡など見られず、この街の広さを感じた。陽が翳り出した頃、煉瓦と鉄柵を組み合わせた塀の向こうに何棟もの高い建物が並んだ辺りに着き、皆は「あれが医大らしいな」と話し合っていた。立派な正門脇の受付を通り、私達は待っていた担当者に大食堂へ案内された。夕食後、私達は分散している独身寮へ案内された。

教材課の私達は、医大のすぐ近くにある二階建ての「育才楼」に割り当てられ、私はIと同室になった。八畳ほどの部屋には畳敷の木製ベットが二脚、それぞれに寝具一式が置かれていた。私達は翌日から開館準備前の図書館業務を手伝うことになった。校門を入っ

てすぐ右側は大講堂が聳え建ち、その隣に切妻屋根の図書館が並んでいた。何段もの鉄板敷の書棚や通路には山積みの書籍が散乱しており、その整理や分類、リストアップなど大変な仕事だと思った。

開校準備は急ピッチに進められていた。私達が食事の往復に教室や病室を覗いてみると、学生や助手たちが煤けた白壁や窓枠などを丁寧に洗いだし、見違えるように明るくなっていて、彼らのこの学校にたいする期待と熱意が伝わってきた。大講堂で「この学校の理念」らしき講義を受けている国民服や背広姿の人達が、休憩中に話し合う上海語らしき言葉を聞いて、興山から一緒にきた中国人も彼らの言葉は「なにを言っているいるか分からない」と言っていた。

教材課の製作室が決り、私達はその清掃と什器、備品などの搬入と、その配置などの段取りに入った。今度の製作室は思いのほか広かった。O課長は「開校すれば教材内容も学生数もぐんと増えるので、ここの要員も大幅に要員予定…」と、話していた。旬日を待たずして十二、三人の新規採用者が私達に紹介された。彼らは今春、近くの魯迅芸術学院洋画部卒業予定者ばかりだったが、年齢は二十二、三歳ぐらいから三十過ぎと幅があり、服装や態度からも生活環境はまちまちのように思えた。私達の制作を歩いて見て回った彼らは、この仕事に関心を寄せているようだった。

春を迎え彼らが私達と一緒に働くようになって間もなく、室長のOさんは彼等に、別室でメーデー行進で掲げる肖像画の制作を担当させた。メーデー当日は彼等が描いたマルクスやエンゲレス、毛沢東や周恩来などの大きな肖像画を先頭に皆が大行進に参加した。行進する行列の中に日本語のプラカードを持った隊列を見かげたが、彼等も私達同様、工業部、衛生部で働く大勢の中国人達と一緒に南下してきた日本人だろうと思った。

開校を目前にした中国医大の正門には、郭松若揮毫（こうもうようきごう）よる大看板が掲げられ、出勤時に私達のような解放軍の軍服姿から青色の国民党服、中国服や背広姿の者達が校門を通る様子は、興山の通勤とは一変していた。それから間もなく、教職員と全学生は「中国医科大学」の金属バッジを着用することになった。私達は「解放軍の胸章を切り取り、このバッジを付けた。とはいえ、現物支給という解放軍の軍人待遇には変わりはなく、国民党で働いていた者や新規採用者のような給料生活者ではなかった。

そのころ、国民党服姿の日本人の先生が二人、教材依頼を兼ねて顔つなぎに来られた。二人は交々に国民党時代のことを「……私のよう医者や技術者達は、敗戦前の日本軍よりはるかに高級待遇で、米軍の肉の缶詰や洋酒や様々な嗜好品などが支給され、不自由なく過ごしていた。それに対照的だったのは、敗戦続きの前戦の将兵達の軍規は乱れ、物資の横領横流しで金儲けをする者達が横行し、厭戦気分が充満していた……」などと過去を話してくれたりもした。

待望の故国への通信が実現したのはこの頃だった。私が「…なんとか元気でこういうところで働いている…」という取り急ぎの消息を親元へ送ったところ、父からの返信「…本家へ出向いていた時、息を切らした母がお前の手紙を持ってきた。文面を見ても、すぐには信じられない気持ちで。何回も読み直した…」と、返信が来た。

この時期瀋陽には、日本語の新聞、雑誌などを発行する「民主新聞社」の設立が準備されていた。そこには、元満州映画ＫＫで働いていた顔ぶれが多く、近く発行の「民主新聞」や月刊学習の友」などの予告版には日本の戦後事情やニュースなどが紹介され、終戦間もない困難の時代の打開に立ち上がる人々の姿に驚かされた。

当時、日本国内で話題になった戦没学生の手記の映画化『きけわだつみのこえ』のシナリオが民主信不戦社へ送られてきたのを機にこのシナリオを演劇化し、新聞発行記念に瀋陽で上演することを企画した。民主新聞社はその実行を元満鉄の映画監督木村荘十二（そとじ）さんにお願いし、瀋陽で働く日本人組織に対しても協力を依頼した。出演者は集められ、絵図室の私達は舞台づくりに参加した。『きけわだつみのこえ』の上演は中国医大の大講堂で何日かに分けて上演された。瀋陽で働く日本人は勿論、この界隈の中国人達も演劇を見に来てくれた。私達は袖幕の隙間から満員の客席を見て安心した。

しかし、裏方である私達は本番中を含めて、稽古中も部分的な場面しか見ることができなかった。この演劇を観にきてくれた絵図室で働く中国人の同僚達は、いずれも日本語に通じていたので、それぞれの感想を聞かせて貰ったところ、（戦争前の日本人の横暴さを知っている私達にとっては、彼等のような人々を取り上げる世相が生まれてたことに驚きを覚えた…）と言うような意見が多かった。

一方国内戦の推移は、国民党軍から捕獲した米軍援助の武器の操

作を一早く習得し、「運動戦」を拡大展開した。新聞報道は北京への入城を年内必至と伝えるとともに、国にづくりの構想から国旗や国歌の制定などについて話し合うよう呼び掛けていた。皆もそれに応え、今まで考えてもみなかった話しをするように活気づいていた。この年の七月、国民党を率いる蒋介石以下。台湾へ転進避難。

中国大陸を制覇した人民解放軍は、日本をはじめとする列強に食い荒らされた半封建的、植民地的国土を、工人（労働者）農民を主体とし、それに同調する民族資本などの諸勢力との統一により、新しい国家建設に入っていった。そして私達に支給されていた解放軍の軍服から、濃紺の人民服に、国民党の服や背広の同僚達も人民服に着替えていった。

「……既に気づいていると思うが、この学校は軍管轄から官への移行が始まっており、それによって私達も中国医大の職員にとり、給料生活者に移行することになる。そのための給与規定作成に必要な自己評価表を君達にまとめてもらい、それに基づく意見を添えて私すら上司に提出する」ということだった。この査定基準は次の通りで、①業務に取り組む姿勢、態度。②業務知識、技術。③経験年数・資格等に大別され、①②③の綜合を十点とし、それを基準に自己評価を記入することになった。

これは頭の痛い申告ではあったが、過去何回も検討会や坦白会なので相互批判を繰り返してきただけに、各人の自己評価と、みんなから出された意見や批判にそれほど差異はみられなかった。二カ月後、支給された始めての給料は、それが妥当と思われる水準に納まっていたようだ。その日、相部屋の私達は給料明細書を見せ合い話し合ったが、それぞれの額面は経験年数の違いほどしかなかった。

部屋代、水道、電気料金などは今まで通り無償だったが、衣服、その他日用品は当然ながら個人持ちとなった、新聞や図書の購読といった日常生活費をみても、映画鑑賞など若干のゆとりができるようになってきた。今までの食事は高粱や粟飯を常食とする大食堂に利用を限られていたがこの機会に食費を前納すれば米食を提供する中食堂へ移ることができた。

このような私達の処遇の変化を見た中国人の同僚や助手、助教達は医大の今後に期待するとともに、来年にも建設される「新中国」における「医療、衛生分野の工作者」育成に努める者　としての気

概を感じ、この学校で働くことに誇りを感じているようにみえた。私達日本人もこのような環境に身を置きながらも、彼等と同じように働いてはいるが、それは医療工作者育成のための良き協力者であろうとしてのことだった。

私達は一九四五年八月、日本の敗戦降伏以来、ソ連における強制労働と飢餓状態の中で生死をさまよう弱者として中国領へ送還された。以来、内戦中の東北人民政府は勝利のため私達抑留者にも困難に耐えることを求めてきたが、俘虜に対する労働提供には某からの手当を支給することを常としていた。その後の炭坑労働においても、中国人労働者と格差をつけることはなかった。中国医大教材課へ転入したときは、解放軍の病院付軍人の待遇として採用され、業務に見合った処遇が保障され、私達もそれに応えるべく努力した。

この間における「学習」では、私達が戦前満州における植民地支配の尖兵（せんぺい）としての誤りを振り返ってそれを正し、再び侵略戦争に加担する愚かさを戒る「働く者の社会」の建設についての方向を見い出そうと学んできた。

振り返れば一九四二年早々、日の丸の小旗と「わが大君に召されたる」の歌声の中をソ満国境へ送られた私達は「耐へ難キヲ耐へ忍ビ難きヲ忍ビ…」に忠実たらんと俘虜の抑圧に耐えるべく努めてきた。にもかかわらず、一九九三（平成五）年。ロシア公文書施設で発見された「大本営報告書」によると、時の政府は「百八十万捕虜についてソ連司令下に移し、国籍離脱までを想定、現地に土着させ。事実上《棄民》化する」という方針を固めていた。

その衝撃的な事実を知った今、あの抑留に耐えてきた者の一人として、時の為政者から私達に何んらかの表明があって然るべきではないのか、と問いたい。そしてそれは、今なお凍土の下に眠る斃れた人達へのせめてもの餞であってほしい。

私達は時代に抗する術もなくあの道を進んだ。
いま生きる人たちには、私達のたどった痛恨の時代を繰り返さないよう願うものである。

戦後七十年
二〇一五年九月三日

自分史Ⅱ　昭和16年春～19年秋
―忠君愛国を叩き込まれた青春―

警察署裏で人糞を焼く

橋詰　四郎

東京都品川区五反田大崎警察署の裏門に通じる道に、私達の住む下宿屋の裏口も面した2階の6畳と8畳を区切る唐紙を取り払った部屋に、徴兵適齢前（満20歳に達する前）の男ばかり4～5人と、徴兵検査を受け、軍隊から帰された体の弱い、22歳のMを暗黙の部屋頭で共同生活をしていた。時代は私の幼児期既に始まっていた戦争を、これ以上拡大させないと言いながら、軍艦マーチで真珠湾のアメリカ海軍に不意討ちを食らわし、大勝利だと厭世気分を一気に吹き飛ばした太平洋戦争の真っ只中、男は戦闘帽にゲートル。女はモンペの時代なのにMは和服の着流しで、定職もなく千葉県の実家からの仕送りで生活し、得体も知れぬが、年下の私達はなんとなくMを尊敬していた。

下宿は、入浴は銭湯、三食外食、私達全員朝食抜き。これは朝食抜きの習慣で、朝食を食べず、昼ご飯まで持ちこたえ、御上から頂いた食券を食堂に渡して食べさせて貰らう「食べ物不足」の時代だった。米穀券（米一人一カ月分配給割当食券）1カ月全券食堂に前渡しして、一日二食だから食堂の主人はよくしてくれた。またこの下宿は私の入居前から、大崎警察署のお巡りさんの隠れ昼寝場所にも利用され、私達は近所の人にも大崎警察署のお巡りさんにも、名前でなく一括「岡田のあんちゃん」と呼ばれ、それで通用していた。

1943（昭和18年）このMに召集令状（赤紙）が来て、クリスマスの日私達は山手線五反田駅で万歳万歳と隣組の人達と見送った。が、年が明けてMが帰ってきた。なんでも入隊した日に殴られ気絶し陸軍病院に入院、2週間目に除隊させられたと云うのだ。家主の岡田は今迄通り仲良くと私達に伝えた。が、町内の理髪店や隣のクリーニング屋は、Mは特高（特別高等警察＝思想、政治活動の取締りが目的、憲兵と共に国民には恐怖の存在であった）だと思われていたようだった。

Mの話によると田舎では（東京では大阪以外を全部田舎と呼ぶ会話であった）この非常時に天皇陛下のお役にも立てない非国民呼ばわりで、隠遁しているらしいのが本当らしい。私達はMに年末から年始2週間でなく、足掛け2年軍隊にいたのだからもっと威張って

下さい。と、大真面目で話していた。

２０歳前の男が４～５人も居れば、硬派も居るし軟派もいる。銀座派も居れば浅草派も居る。日曜日銀座派が、日劇ダンシングチームを見に行き、開演前に並んでいた全員、憲兵が来て皇居前広場に引率され、皇居広場の雑草抜きを１日中させられたと怒って帰って来たこともあった。浅草派が粗悪紙のプログラムを見せ〇〇館で、今で言うパンチのある歌い方をする笠置シズ子が凄いと絶賛するので、連れだって行ったら歌は無しで終ってしまい文句たらたら帰ったら、翌朝Ｍが新聞を見せて説明してくれた。彼女の歌い方は敵性国家（アメリカ）的な歌い方なので官憲に逮捕され、今後歌を歌うなと命令されたと。国は非常時、非常時と国民を煽り、生活必需品を筆頭に娯楽まで剥奪していった。そんな時代だった。

ヨーロッパではロンドンがドイツ軍の空襲で壊滅と新聞は報じているが、アメリカと戦争したのに東京は空襲もなく、大崎警察署前の大通りからロータリー迄の歩道には毎晩屋台が並び、照明の暗い店は「手相」と「人相」占いで、何故かこの二人は場所決めで取っ組み合いの喧嘩を度々やる。周囲も慣れ他の屋台のおじさん、通行人、お巡りさんも、またかと満足するまで喧嘩をさせていた。似顔絵描きは男と女で女性絵描きに人気があり、屋台は焼鳥屋が多く本物焼鳥と偽物焼鳥が、本物焼鳥屋で「あんちゃん俺んちは鳥だから値が高くて払えないよ」と諭されることもあった。

渋谷か目黒の焼鳥屋台の噂で、酔客が犬に「串」を与えたのが始まりで、毎晩現れる犬が酔客の話題と人気になり、新聞が主人を迎える忠犬と報道し軍国主義の「忠義犬」と美談報道。犬は「串＝餌」目当てと話したら「特高」に捕まったと、まことしやかに伝わってきた。情報の溜まり場で物知り理髪店の主人は「この土地はお江戸の昔からお犬様に関わると火傷するか噛まれるかだ、黙っているのが一番」と看破したとＭから聞いた。

家主の岡田の知り合い薄田さんが鵠沼（神奈川県藤沢市）に別荘を持ち、非常時なので今年の海水浴で最後にするとか、使用前に出向き窓を明け空気を入れ替え、黴苦さも飛ばす役に私達を選び３人が引き受けた。鵠沼は半農半漁の農漁地に東京へ通勤する人達が進出。進出者主婦間の会話は「ザーマス」女中を雇い、通勤車両は３等車（車体に太い赤帯）２等車（車体に太い水色帯）かで、発言力のあるのはご主人が２等車乗車の奥様であった。

地元人の屈強な男子は戦争へ、残された女性と年寄り達が農と漁で貧しい暮らしを強いられていた。漁は円錐形の大網を沖に沈め、網の大口の両端に付け浜まで伸びたロープを総出で手繰り寄せる地引き網漁だ。獲物を知りたい好奇心と暇で手伝ったら強力助っ人と喜ばれ、浜のおばさんや買い付けに来るお女中さんとも会話。聞かないのに話しかけられ内情を種々知るようになった。２等車家の女中は美人でザーマス奥様は人使いが荒いと評判だ。私達の役目は３～４日で終わったが１週間ほど滞在し、引揚げに際し正雄が「四郎竹藪で蛇を捕まえてこい」蛇は野鼠や家鼠を食べるので尊敬され、別荘敷地内の竹藪にもいた。３人は回り道をしザーマス家の庭園へ蛇の死骸を投げ込み、意地悪婦人が悲鳴を上げる姿を想像し二度と来ることのない鵠沼を去った。

娯楽も言論も非常時に呑み込まれ、汽車の切符も入手が難しくなり「チチキトクスグカエレ」の電報を見せ切符を買うまでになっていた。お盆は川崎の栄太郎を除き残った。お盆前家主の岡田が「お前等鵠沼で何をやらかした」と怒りにきた。私達と入れ代わり薄田一家が鵠沼へ行くと、下品な私達の悪行で上品な一家は居づらくなり予定を早め帰ってきた、と言うのだ「薄田の使用人が奇麗なお女中にすげなくされ、腹いせに蛇をお庭に投げ込み、お女中を気絶させた噂話の最高潮の真っ只中へ行った」と言うのだ。正雄の正義感は見事、鵠沼郷の意地悪婦人の地位と力を更に高めることに利用されていた。

私は、中野正剛（１８８６～１９４３）《思想家？東条内閣の転覆を企て、逮捕され憲兵に拷問死されるならと割腹自殺、新聞には報道されなかった。著書に「獄中獄外」》に心酔していて、彼の追っかけをしていた。電柱や板塀にＢ４紙の「中野正剛大演説会」の知らせが貼られ、聞きに行った。会場は目黒区、港区、品川区の公会堂が私が、徒歩や自転車で聞きに行く行動範囲で、私達はよくＭをまとめ役にして、１０代で、戦争と天下国家を論じ合っていた。

弁士（当時はこのような呼び方であった）は壇上の中央、左右どちらかの隅にサーベルを付けた巡査が１人腰掛け、弁士の話す内容をチェックし、駄目なら「注意」と警告を発し、言論の自由は完全に剥奪されていた。弁士は話す内容を変えねばならず「警告」３回で講演が出来なくなる法規制であった。弁士の力量は警察官の「警告」多寡で聴衆間に人気があった。戦争批判や戦争反対など『匂わせただけ』で投獄、拷問死される時代で、出征兵士や戦死者の遺骨送迎に出ないだけで非国民、天皇陛下への不忠義者の烙印を押され

、地域生活（物資統制で隣組を通して配給制度から外される）から排除される仕打ちを受けた。

明治から戦争している日本は、戦争で死ぬことが天皇陛下への最高の義勇奉公で一家の誉れであり、戦死者の家は玄関表札に並び「軍国の家」の木札を御上が取り付け家に向かって「礼」をさせられ、戦死した家族が人前で泣くものなら、天皇陛下への不忠義者のレッテルを貼られ、人前で泣くことも許されない天皇中心の軍国主義の国であった。中野正剛は私達若者に「死ぬなと」言えぬので「天皇陛下の御為に名誉の手柄を立るのが最高の親孝行だ、手柄話を両親に話すために絶対生きて帰ってこい」この『生きて』を力強く話すのであった。

この日は既に「警告」を2回受け、3回目の「注意」で話を締め括るなと期待して聞いていると、きたきた「赤子（せきし）である諸君は、快眠・快食・快便し、天皇陛下から戴いた質実剛健の身体で、天皇陛下にご奉公すべきである。天皇陛下も皇后陛下も快眠・快食・快便で諸君と同じである」《天皇は現人神（あらひとがみ）でも、諸君と同じ、飯も食べるし糞もする。これはもう重大な不敬罪》警官「注意」でなく「逮捕」と叫び立ち上がった時は、中野正剛壇上から飛び降り、正面の扉へ一目散、聴衆は左右に分かれ逃走通路を開け協力し後は追う警官を妨害。

この時の模様を部屋で話したら、1人が「天皇陛下のウンチはどうするのだろう」から始まり「おそれおおいから人の目に触れないように地中に埋める」「水洗で流し品川沖で魚の餌になり、江戸前寿司のネタになって帰ってくる」「いや、天皇陛下はおそれおおい御方で、その方の分身であるウンチを魚に食わすなどもっての外、おそれおおいから薬品で焼き灰にする」「ウンチを焼くとどんな臭いがするのだろう」「論より証拠焼いてみよう」。

かくして『岡田のあんちゃん達は』隣組は勿論、風に乗り臭いの届く広範囲へ、大崎警察署も巻き込む《ウンチ焼却事件》を引き起こしたのである。

前述したように、裏木戸は大崎警察署の裏門への道であり、両側の家もこの通りに裏木戸があり、どの家もトイレは水洗でなく汲み取り式で、裏木戸側にあった。この裏道に七輪コンロを持ち出し、炭火をガンガンおこし鉄板が赤くなるまで焼いた。円陣の中央のコンロを囲みウンチ焼きの儀式の準備が整ったのである。誰かが「そ

ろそろ乗せてみるか」汲み取りに行った奴が柄杓山盛りにして持ってきた。乗せた途端爆発だ。

爆発と共に真っ白い湯気、熱で跳返り飛び散る熱いウンチ、強烈な臭気、これらが一気に頭の先から足の先まで全身に降りかかり、アッと言う間に大きな塊となって周囲に広がる。アチチと飛び上がり一瞬脳裏に全員が「床屋」とひらめいたらしい。全員叫びながら床屋へ一目散に飛び込み、無言で我先に、洗面台を占領した。ホッとする間もなく、床屋の親父やお客が臭い臭いと騒ぎだし、とんでもない奴だと放り出される。悪臭は警察署にも届いたらしい。近所のおばさんは「岡田のあんちゃん出ておいで」警官は「岡田の小僧出てこい」と探している。

附近は悪臭プンプン、炭火はまだ燃えウンチ大方焼けで炭化、それを囲み鼻を押さえながら、おばさん達、隣のクリーニング屋、床屋一家にお客や野次馬も混じる中で私達は必死に弁明。気の早いおばさん達は「失礼な天皇陛下様がお可哀想に」と、おばさん達だけで罪状を決めている。野次馬達は「神聖」な天皇陛下を侵したから逮捕は間違いないとか、「徒党」を組んで天皇様を馬鹿にした行為は重罪だと、勝手に罪状を決め、私達の罪をだんだん重くしていく中でお巡りさんの事情聴取が始まる。

警察署の裏だからお巡りさんも数人来ている、経過説明の途中、昼寝によく来る私服のお巡りさん、クスッと笑い、全部を聞かず「これからは、おそれおおいから天皇陛下のお名前は出さないように」の『厳重注意』で勘弁され、おばさん達や野次馬の期待を見事に裏切った。抑圧され娯楽も剥奪された世相で、おばさん達は時代が時代だけに大きな声で話せず、ひそひそ話しで「天皇陛下とウンチ焼却事件」として地域に広がり、銭湯や食堂では知らない人達まで、親指と人差指で鼻を摘む仕草をして「あんちゃん達やったんだって」と親しく話しかけ、一服の清涼剤に利用されていた。

日本は私の生まれる前から、いつ終るか判らぬ戦争で男を使い果し、徴兵年齢を1年繰り下げ、私も１９歳で１９４４（昭和１９）年7月歩兵に甲種合格。おばさん達は人気者が1人居なくなると惜み、お巡りは問題児が減るとホッとした貌で、入場券で五反田駅ホームまで出向き万歳万歳と歓呼の嵐で見送ってもらい、恐怖の軍隊に入営するため故郷へ向け出発した。

★戦争歌とマスコミ

★大阪毎日新聞・東京日々新聞
募集当選歌

◎爆弾三勇士　昭和7（1932）年5月

一　廟行鎮の敵の陣
われの友隊すでに攻む
おりから凍る如月の
二十二日の午前五時

二　命令下る正面に
開け歩兵の突撃路
待ちかねたりと工兵の
誰か後をとるべきや

三　中にも進む一組の
江下・北川・作江たち
凛たる心かねてより
思うことこそ一つなれ

四　われらが上に戴くは
天皇陛下の大みいつ
後ろに負うは国民の
意志に代れる重き任

五　いざこの時ぞ堂々と
父祖の歴史に鍛えたる
鉄より固き忠勇の
日本男子を現わすは

六　大地を蹴りて走りゆく
顔に決死の微笑あり
他の戦友に遺せるも
軽く『さらば』と唯一語

七　時なきままに点火して
抱きあいたる破壊筒
鉄条網に到りつき
我身もろとも前に投ぐ

八　轟然おこる爆音に
やがて開ける突撃路
今わが隊は荒海の
潮のごとくに躍り入る

九　ああ江南の梅ならで
裂けて散る身を花となし
仁義の軍に捧げたる
国の精華の三勇士

十　忠魂清き香を伝え
永く天下を励ましむ
壮烈無比の三勇士
光る名誉の三勇士

★東京日々新聞・大阪毎日新聞
『国難突破』応援歌募集当選歌　昭和7（1932）年7月

◎日本国民歌　作曲・山田　耕筰

一　吼えろ　嵐　　二　狂え　怒濤
恐れじ　我等　　ゆるがじ　我等
見よ　天皇の　　見よ盤石の
燦たる　大みいつ　　厳たる　祖国
遮る雲　　太平洋
断じて徹る　　断じて　安し

三　来れ　猜疑
許さじ　我等
見よ　極東の
確たる　平和
亜細亜の土
断じて　守れ

四　挙れ　日本
いざいざ　我等
見よ　国民の
凜たる　苦節
正義に　今
断じて　立てり

★大毎・東日小学生新聞懸賞募集当選歌
昭和13（1938）年3月

◎少国民愛国歌

一　国を思えば　血が躍る
胸のしるしも　日の丸の
われらは　日本少国民
われらは　日本少国民
かけよ、かけ、かけ、
走れよ　走れよ
愛国競走　それかけよ

二　御代の光に　生いたちて
清い使命を　受けついだ
われらは　日本少国民
われらは　日本少国民
かけよ、かけ、かけ、
ぐーんと抜け抜け
愛国競走　それかけよ

三　世界平和の　決勝点
見えた頑張れ　もうすぐだ
われらは　日本少国民
われらは　日本少国民
かけよ、かけ、かけ、
真先かけて
愛国競走　それけよ

四　汗と血潮の　我が記録
守れ祖先の　いさおしを
われらは　日本少国民
われらは　日本少国民
勝て、勝て、勝て、
東の空に
掲げよ日の丸　それ掲げよ

★大毎・東日新聞　懸賞応募当選歌
昭和13（1938）年3月

◎みくにの子供

作曲・中山　晋平

一　お山に芽生えた　椎の実が
いつか大きく　なるように
すめらみくにの　子供らは
強く正しく　伸びましょう
伸びましょう

二　み空に輝く　お日様は
いつも笑って　雲の上
すめらみくにの　子供等も
皆なほがらに育ちましょう
育ちましょう

三　亜細亜の東よ　日の本に
今日もひらめく　日の御旗
すめらみくにの子供らは
お手々つないで　仰ぎましょう
仰ぎましょう

四　平和のみ空を　かきみだし
※君にあだなす　ものあらば
すめらみくにの　子供らは
今に懲らしてみせましょう
みせましょう

五　足並み揃えて　旗たてて
歌えわれらの　愛国歌
すめらみくにの　子供らは
共に雄々しく鍛えましょう
鍛えましょう

※君＝天皇陛下

★大毎・東日新聞募集歌

◎大陸行進曲

昭和14（1939）年1月

一　呼べよ日本　一億の
生命あふれる　足音に
地平もゆれよ　大陸の
全てのものは　いま朝だ

二　昨日よ父が　また兄が
勝鬨あげた　大陸に
これから清い　美しい
大和桜を　咲かすのだ

三　思えば永く　立ちこめた
平和をみだす雲と霧
いま晴れわたる大陸を
共に行く日は　もうすぐだ

四　そうだ情の　手を執って
新たに興す　大亜細亜
友よ一緒に　防共の
固い砦を　築くのだ

五　感謝に燃える　万歳を
送れ輝く　日の丸に
四億の民と　睦まじく
君が代歌う　日は今だ

六　はてなく青い　野の風に
今日から鳴るぞ　あの旗は
進む大陸　日本の
意気のしるしだ　魂だ

★朝日新聞　選定　昭和14（1939）年2月

◎父よあなたは強かった

★皇軍将士に感謝の歌★

一　父よあなたは　強かった
兜も焦がす　炎熱を
敵の屍と　ともに寝て
泥水すすり　草を噛み
荒れた山河を　幾千里
よくこそ撃って　下さった

二　夫よあなたは　強かった
骨まで凍る　酷寒を
背も届かぬ　クリークに
三日も浸って　いたとやら
十日も食べずに　いたとやら
よくこそ勝って　下さった

三
兄よ弟よ　ありがとう
弾丸も機雷も　濁流も
夜を日に進む　軍艦旗
名も荒鷲の　羽ばたきに
残る敵機の　影もなし
よくこそ遂げて　下さった

四
友よわが子よ　ありがとう
誉れの傷の　物語り
何度聞いても　目がうるむ
あの日の戦に　散った子も
今日は九段の　桜花
よくこそ咲いて　下さった

五
ああ御身らの　功こそ
一億民の　まごころを
一つに結ぶ　大和魂
いま大陸の　青空に
日の丸高く映えるとき
泣いて拝む　鉄兜

★朝日新聞　選定歌　昭和14（1939）年2月

◎兵隊さんよありがとう

★皇軍将士に感謝の歌★

一
肩を並べて　兄さんと
今日も学校へ行けるのは
兵隊さんの　おかげです
お国のために
お国のために戦った
兵隊さんの　おかげです

二
夕べ楽しい　ご飯どき
家内揃って　語るのも
兵隊さんの　おかげです
お国のために
お国のために　傷ついた
兵隊さんの　おかげです

三
淋しいけれど　母さまと
今日もまどかに　眠るのも
兵隊さんの　おかげです
お国のために
お国のために　戦死した
兵隊さんの　おかげです

五
明日から　支那の友達と
仲良く暮して　いけるのも
兵隊さんの　おかげです
お国のため
お国のために　尽くされた
兵隊さんの　おかげです
兵隊さんよ　ありがとう
兵隊さんよ　ありがとう

★朝日新聞・大日本防空協会制定歌

◎防空の歌　昭和15（1940）年6月

一
朝だ真澄の　青空だ
光は呼ぶぞ　眉あげて
尊い国土の　防衛に
競う一億　鉄壁と
護る我等の　大空を

二
空を織るりなす　光芒の
照空灯に　聴音機
一機の敵も　逃がすなと
迎え蹴散らす　荒鷲や
闇に火を噴く　高射砲

三
大和心の　意気燃えて
迫る敵機の　猛襲も
日ごろ鍛えた　訓練に
なんの爆弾　焼夷弾
往くぞ決死の　この覚悟

四
皇国の空を　ゆるぎなく
護り固めて　高らかに
日本晴れの　青空に
仰げかしこい　大みいつ
アジアの空に　陽が上る

★東日大毎推薦・大政翼賛会宣伝部後援
昭和16（1941）年3月

◎出せ一億の底力

一
出せ一億の　底力
桜咲く国　日の本の
無敵の軍の　前進に
歩調　あわせよ
一億いざともに
みいつの下まっしぐら
臣道ひとすじに
行こうぞ　さあ
これからだ

二
出せ一億の　底力
昨日を捨てて　新しく
持場に尽くす　奉公の
赤誠　捧げよ
一億いざともに
みいつの下まっしぐら
臣道　ひとすじに
行こうぞ　さあ
これからだ

三
出せ一億の　底力
東亜に築く　新秩序
光と仰ぐ　肇国の
理想　つらぬけ
一億いざともに
みいつの下まっしぐら
臣道ひとすじに
行こうぞ　さあ
これからだ

作詞・作曲
コロンビア　歌　堀内　敬三
　　歌　藤山　一郎
キング　歌　二葉あき子
　　歌　永田鉉次郎
ポリドール　歌　奥田　良三
テイチク　歌　鬼　俊秀
　　歌　中村　柾子
ビクター　歌　柴田　睦陸
　　歌　大谷　冽子

祈りつつ
休まず
鶴折る
少女あり

編集後記

戦争のできる国にして子どもに引き渡せるものか。
眠りに入る広島平和公園・少女貞子像・撮影橋詰